

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二十一主日 C 年

小西広志

2022 年 8 月 21 日

朗読箇所

第一朗読 イザヤ書 66 章 18 - 21 節

第二朗読 ヘブライ人への手紙 12 章 5 - 7、11 - 13 節

福音朗読 ルカによる福音書 13 章 22 - 30 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 8 月 21 日、年間第二十一主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

献げ物

第一朗読ではまず 20 節にある「献げ物」に注目してください。この単語はヘブライ語でミンハーと言うそうです。これは、ある人がある人に贈る「贈り物」や「貢ぎ物」の意味があると同時に、人が神さまに向かって贈る、献げる「献げ物」の意味もあるそうです。今日の朗読の箇所ではイスラエルの民が「献げ物」を聖なる山エルサレムに献げるのと同じように、諸国の民を「献げ物」として献げ、主を礼拝する時がやって来るとします。

次に 21 節の「祭司とレビ人を立てる」にも注目しましょう。すでに諸国の民が神殿での礼拝をするようになることが示唆されていました (56 章 3、6-7 節)。ここでは神殿で奉仕するようにと、諸国の民から祭司とレビ人が選ばれることが語られています。

懲らしめる

第二朗読ですが、『ヘブライ人への手紙』の 11 章では先祖たちの信仰が語られました。「信仰によって」と繰り返されたのが印象的でした。続く 12 章ではまず、イエスさまの模範が語られます (1-3 節)。そして今日の朗読箇所では神さまの父としての教育が語られ (4-13 節)、「あなた方」を繰り返しながらキリストからの招

きへと続きます (14-29 節)。

5 節から 6 節は旧約聖書『箴言』3 章 11 節から 12 節の引用です。「懲らしめる」はギリシア語でエレンコーですが、「明るみに出す、さらす、説明する」の意味があります。そこから「認させる、指摘する」の意味へと発展します。さらに「叱る、たしなめる」の意味が生まれ、もっと強い意味で「罰する、懲戒する」となります。主が懲らしめるのは罪を明るみに出し、さらすためです。しかし、神の約束を信じない者を懲らしめ、罪を指摘し、罪を認めさせるのは、すべての人を救いへと導きたいという願いがあるからなのです。

狭い戸口

福音朗読では 24 節にある「狭い戸口」に注目してください。戸口はギリシア語の原文ではシュラーといえます。文字通り、建物の「戸、門、入口」を指す言葉です。そこから意味が深まっていて、あるものとの関係の始まりや遮断、終わりを表す言葉となりました。今日の福音朗読では三度、この言葉が登場します。狭い戸口は神の国への入口です。戸口を通ることで神の国との関係が始まります。しかし、この戸口は家の主人が締め切ってしまうこともできる、そんな戸口です。閉られてしまっただけでは、外から戸口をたたいても断られるだけです。そして、「狭い戸口」に入るように「努めなさい」とあります。ギリシア語の原文ではアゴーニゾマイという動詞が使われています。これは競技場を表すアゴーンから派生した単語です。スポーツ競技をする人が勝つことを目指して練習に励み、身体を鍛え、努力する様子を表しています。

そうしますと、24 節でイエスさまが言いたい本当の意味は次の通りとなるのだと考えます。誰が救われるのかを考えて「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」(23 節)と余計な質問をして、時間を無駄にするよりも、運動選手たちが自分に打ち勝って、練習を重ねていくのと同じように、「狭い戸口」から入るように努力するべきだ。「狭い戸口から入る」とはそこに殺到する人々を押しつけて入るのではなく、自分自身が努力を重ねて入るものなのだ。

25 節の「戸を閉めてしまってからでは」もここに留めてください。戸を開くのも、閉めるのも主人であることに注意しましょう。25-27 節では「戸」を境として内と外の対比が記されます。努力を重ねずに戸口から入れず、閉め出されてしまった人々は、かつて主人と交わした関係を引きあいに出して、入れるように懇願します。確かに彼らはかつて「一緒に食べたり飲んだり..... 教えを受けた」りしたかも知れません。しかし、主人は今、彼らを拒絶するのです。かつて食卓を共有し、教えの時と場所を共有したとしても、それは主人との本当の関係を築いたことにはならないのです。

まとめ

今日の福音は人と人とが向き合うことの大切さを教えてくれているようです。「狭い戸口」はお茶室のにじり口を思い出させます。2 尺と 2 尺 2 寸の小さな戸口から身をかがめて茶室に入ります。武将も商人も農民も区別はありません。にじり口はすべての人に開かれています。ただ、入るときに、自分が身につけているものをすべて捨てなければならない。いえ、自分が身につけていると思いきやこんでいるものもすべて捨てなければ「狭い戸口」からは入れないのです。茶室ではお茶を介してお亭主と向き合います。幕末の大老で茶人としても名高かった井伊直弼 (いいなおすけ) はそんな人と人とが会おう間柄を「一期一会」と言い表したのは皆さ

まもご存知でしょう。しかも、お茶席での関わりは、お客が帰った後も続きます。同じく井伊直弼はそんなお亭主の姿を「独座観念」と言いました。静かになった茶室で、お亭主は今さっき繰り広げられていたお客との交わりを思い起こすのです。

イエスさまと向き合うことも同じかもしれません。虚勢を張り、イエスさまを知っているとうそぶいて交わろうとするよりも、まったく静かな心で、すべてを捨てて、わたしたちがイエスさまと向き合わなければなりません。そこにあるのはわたしたち一人ひとりとイエスさまの「一期一会」な交わりなのです。そして、イエスさまはわたしたち一人ひとりのことを静かにいつも思ってくださいています。「狭い戸口」を閉めたイエスさまにあるのは、わたしたちへの思いなのです。

教会の戸口は広いです。しかし、その奥にまで到達するためには「狭い戸口」を入れるために自己を見つめ、自己と出会う鍛錬が求められています。この鍛錬は一人のするのではなく、教会の共同体の皆さんと共に行うのです。

それではまた来週。